

聖書に学ぶ

——「出エジプト」伝承の史実性とその思想的意義——

月 本 昭 男

ご紹介いただきました月本昭男です。

無教会に属する者が上智大学に迎えていただいた、とご紹介いただきました。4年前に立教大学を定年になり、上智大学に拾っていただきまして、4月1日に理事長から辞令を渡されました。その際、辞令式に出るようと言われましたが、上智大学は教職員が大勢ですから、新任教職員全員の辞令交付式かと思いましたら、なんと私一人だけが学長や学部長を前にして、理事長からじかに辞令を手渡されたのです。その時、理事長は次のような言葉をかけてくださいました。「キリスト教の歴史の中では、カトリックとプロテスタントが対立したり、時にいがみあったりした。しかし、今や、そういう時代ではない。カトリック、プロテスタントという教派を越えて、日本の福音のためにともに尽力いたしましょう」。私はその言葉にいたく感銘を受けました。その言葉に十分応えてきたかどうか、心許なくはありますが、とにかく、2014年から、上智大学で旧約聖書、古代イスラエル史、それに、ご紹介にもありましたように、聖書考古学などの授業を担当させていただいております。

今日は、阿部先生から講演の要請を頂きました。一昨年、同じように、創世記についてお話をさせていただきましたので、その続きということで、出エジプトの物語を題材に選ばせていただきました。皆さまがたも出エジプトの物語はよくご存じだと思いますが、まずは物語をひととおり振り返ってみましょう。

1 出エジプト ― 民族の歴史伝承

エジプトに移り住んだヤコブの子孫たちは数を増しますが、エジプトの宰相として活躍したヨセフを知らない王が登場し、イスラエルの民の増加をおそれて、彼らを奴隷にして働かせるにいたりました。そこで、奴隷にされて呻きの声を上げたイスラエルの民が、彼らの解放を神から託されたモーセによって、エジプトの奴隷の家から救い出される物語です。

モーセ誕生の物語に続き、成長して同胞を苦しめるエジプト人を殺害したモーセはミディアンに逃れます。彼はミディアンの地で神の召命を受け、再びエジプトに遣わされ、兄弟アロンとともに、ファラオと直談判いたします。しかし、ファラオはイスラエルの民の解放を許しません。そこで次々と災いの奇跡が起こります。ひどい災いを見たファラオは、いったんは奴隷解放を認めますが、災いが止むと、心を翻し、奴隷解放を許さない。こういうことが繰り返されますね。そして、最後に、神の使いによってエジプトの初子が殺害されることになります。そこで、イスラエルの民のエジプト脱出が認められるのです。

ところが、イスラエルの民がエジプトを脱出しますと、ファラオは奴隷を連れ戻そうとして、軍を率いて、彼らを追跡します。後からはエジプトの軍隊が迫り、前には海が立ちはだかる中で、モーセに率いられてエジプトから脱出した民は、あなたはわれらをこんなところで死なせるために、エジプトから導き出したのか、とモーセに食ってかかります。窮地に立たされたモーセは、杖を海にむかってかざすと、海は二つに割れて海底が現れ、イスラエルの民は乾いた海底を渡ってゆきます。しかし、その後を追ってエジプト軍が海底に入ってゆきますと、両方に壁のように分かれた水がもとに戻って、エジプトの兵士らは溺死し、ファラオの軍隊は殲滅されました。モーセはそのことを「勝利の歌」に歌い、モーセの姉妹ミリアムも、女たちと太鼓をたたいて神を賛美しました。これが出エジプト記 15 章までの物語の概要です。

しかし、それから約束の地に行くまでに、大変な歳月がかかりました。40 年ですね。「荒野の 40 年」と呼ばれます。その間、さまざまな出来事が起こり、神の怒りに触れた第一世代は、すべて、荒野で命を落とし

した。第二世代のみが約束の地に足を踏み入れることが許された、と語られます。

このような出エジプトの物語は、イスラエルの民族の歴史伝承の中で、最も重視されました。ですから、例えば、その後の指導者ヨシュアやサムエルの告別の辞には、出エジプトの出来事が回顧されます。また、都合 150 の作品がまとめられた詩篇の中には、歴史を回顧する作品がありますが、その中で、回顧される歴史伝承の中に、アブラハム・イサク・ヤコブなどの父祖たちが登場することは稀ですが、出エジプトの物語は繰り返し言及されます。しかも、詩篇の 78 篇、105 篇、106 篇などは、出エジプトの出来事に言及するだけではありません。それらの詩篇は、その全体が出エジプトの物語を歌う作品として仕上げられているのです。つまり、旧約聖書を残したイスラエルの人たちにとって、エジプトの奴隷からの解放は、自分たちの民族の最も大切な物語伝承だったのです。

そうなりますと、いったいこの出エジプトの出来事は本当に起こったのであろうかという、出エジプトの物語の史実性が問題になります。皆さまがたの多くは、出エジプト物語において、海が二つに分かれ、水が両側に壁のようになったという記述は、実際に起こった出来事としては認めがたい、と思われると存じます。自然法則に反する現象だからです。しかし、それでも、イスラエルの民がエジプトの奴隷から解放されたということ自体は歴史的な出来事であつたろうと、思っておられるのではないのでしょうか。そこで、はじめに、出エジプトの歴史性について論じてみたいのですが、その前に、聖書に出て来る奇蹟物語をどう読むか、という点に触れておきましょう。

2 奇蹟物語をどう読むか ― 遠藤周作に触れて

奇跡をどのように説明するか。なかなか難しいのです。出エジプト物語の中のクライマックスともいえるべき「海の奇蹟」に関しては、私は中学生のころ、次のような説明を聞きました。実は、海の満ち引きの大きな差のあるところを、引き潮のときに、イスラエルの民は渡ったのである。そして、エジプト軍がそこを渡ろうとしたら、満ち潮になり、彼ら

はすべて溺れ死んでしまったのである。これを聞いて、中学生の私は納得させられたのです。

しかし、大学生になり、次のような遠藤周作の文章に触れました。「海の奇蹟」を潮の干満で説明するような読み方は「合理的な解釈」です。イエスが湖の上を歩いたという物語は、実は砂浜を歩いていたのだが、遠くから見たら、水の上に立っているように見えたとか、イエスはガリラヤ湖をよく知っていたから、水面のすぐ下の岩に立っていた、という類の解釈です。遠藤周作によれば、そうした合理的理解は人間の精神の貧困さを示している。それに比べれば、奇蹟をそのまま信じる、そういう人間の心性のほうがはるかに高尚である、と記していたのです。私はそれを読みましてから、奇蹟物語の合理的な解釈から離れました。

遠藤周作に触れたついでに、もう少し横道にそれますが、残念なことに、彼が旧約聖書に言及することはほとんどありませんでした。旧約聖書の神は好きではなかったらしいのです。審きの神、怒りの神と理解していたからでしょうか。しかし、旧約聖書をしっかり読みますと、神には怒りや審きだけでなく、憐れみや慈しみという面があることがよくわかります。私は遠藤周作が旧約聖書の神のそうした側面をしっかり理解してくれていたなら、と思わずにはいられません。

もっとも、若いときから遠藤周作の作品は好んで読んできました。映画でも有名になりました小説『沈黙』の初版が出たのが、私が高校三年生になる直前、1966年の3月でした。高校三年生になりましたら、私が大学でキリスト教の勉強を目指していることを知っている担任の国語の先生から、『沈黙』を読むように勧められたのです。受験勉強に集中しなければならぬ私は、小説どころではない、との思いがありましたが、先生が勧めるのだからと、それを買って置き、夏休みに読んでみました。そして、たいへんな衝撃を受けました。

翌年、大学に入学し、長期休暇を利用して、長崎まで旅をしました。一番の目的は、遠藤周作が長崎で見て、衝撃を受けたという踏み絵を見るためでした。彼は磨耗した踏み絵を前にして、どれだけ多くの人がこの踏み絵を踏んだのか、思いを馳せ、それが『沈黙』という名作を構想するきっかけになった、と書いていたからです。長崎の博物館で遠藤周作が見たであろう、その磨耗した踏み絵を見せてもらいました。半世紀

近くも前のことですから、そのときの記憶はすでに薄れてしまっているのですが、後に、少しばかりキリシタンに関する研究書などを読んでみますと、踏み絵を考案したのは井上筑後守という長崎奉行でした。

彼はもともとキリシタンでしたが、逆に、キリシタンを摘発する側に立ちました。踏み絵にはいくつかの図像がありますが、ピエタの像が代表的でしょうか。井上はその踏み絵の図柄ははじめからぼんやりと作らせたのだそうです。あまりくっきりしていたら踏みにくからう、と考えました。踏もうとする人は、摩耗している踏み絵をみれば、自分の前にたくさんの人が踏んだと直感するだろうから、踏みやすくなる。それで、はじめから磨耗したような形で作ったんだそうですね。実に狡猾ですね。その狡猾さは『沈黙』にも、みごとに描かれています。それに遠藤周作まで騙されたのです。

この『沈黙』以来、私は遠藤周作の作品を好んで読んできました。しかし、遠藤周作の日本文化とキリスト教に関する理解には、必ずしも賛成はできませんでした。彼に賛成できない点の一つは、遠藤周作が理解した日本の宗教風土とキリスト教の関係です。彼によれば、日本人が求める神は、悲母観音像に代表されるような「母なるもの」だということです。どんなときでも赦してくれ、包んでくれる母のような神。和辻哲郎の言葉でいえば「無限抱擁」です。そのような母性的、女性的なる神を求めている。そこにキリスト教が「審きの神」を持ち込んでも、受け入れられるはずがない。しかし、新約聖書のイエスの物語を読んでみれば、イエスという存在には、優しい「母なるもの」、どのような人でも受け入れてくれる包容力がある。そこに目を向けた遠藤は、そうした観点から、『イエスの生涯』をはじめとする「イエス物」を発表しました

しかし、旧約聖書の審きの神は日本の宗教風土には合わないし、日本人には受け入れがたい、という発想は文化史的にも間違っているのではないかと私は思います。例えば、今日、私たちが日本の文化として海外に紹介する代表的なものには、華道があり、茶道があり、仏教寺院やその庭園があります。しかし、これらはおおむね仏教を基礎にしています。そして仏教は日本古来の宗教ではなく、インドからシルクロードを経て、中国や朝鮮を介して日本に伝えられました。日本書紀によれば、538年でしたか、百済の聖明王が、日本に仏像や経典を伝えたといわれ

ます。仏教は、日本に入ってきたとき、異質な宗教であったはずですが。ですから、日本古来の宗教とは摩擦を起こし、対決をしながら、受容されてゆきました。そして、新たな日本の文化がそこから築かれてゆきました。異質なものの出会いが、新しい文化を創造するのです。日本人がそのまま何の抵抗もなく受け入れられるものが入ってきても、そこから新しい文化は生まれないのです。

このように、日本の文化ということを考えますと、キリスト教は異質な宗教として日本に入ったほうがよいではありませんか。そこに摩擦が起こる、しかしその摩擦の中から、新しい日本の文化が創造されてゆくではありませんか。事実、明治以降、キリスト教信仰が日本的伝統に受け入れられる中で、相克や対決が起こりながら、新しい思想が生み出されてゆきました。例えば、若き日にこの札幌の地でキリスト教に触れ、後に、日本を代表するキリスト教思想家となった内村鑑三の思想などはそのようにして培われたのです。

とはいえ、遠藤周作の書いたものから学んだことも少なくありませんでした。その一つは聖書の文学性です。彼がヨハネの福音書 13 章に伝わる最後の晩餐の一場面について記した一節が思い起こされます。最後の晩餐のおり、イエスは「ここに座っている一人が私を裏切ろうとしている」と爆弾発言をいたします。そこで、ペトロが「その弟子は誰ですか」と尋ねます。するとイエスは「私がパン切れを浸して与えるのがその人だ」と言ってイスカリオテのユダに与えます。ユダがそれをとると「サタンが彼の中に入った」。イエスは「しようとしていることを今すぐしなさい」と言った。そこでユダは部屋を出て行くのですが、ほかの弟子たちは、まさかユダが裏切るとは思わなかった。「ユダはパン切れを受け取ると、すぐに出て行った。夜であった」とその場面は締めくくられます。

遠藤周作はこの、最後の「夜であった」という短い言葉をとりあげました。灯りのともる部屋から、ユダは外に出て行った。夜だから外は暗い。明るい光の中から暗い闇の中に出て行った。それは単に場面を表すだけではなく、ユダの心中を示してあまりある表現である。作家ならば数頁を費やして、そのときのユダの心の動きを描くであろう。ところが、聖書はそのすべてを「時は夜であった」と一言で記している。遠藤周作

はこの箇所をそう読みとり、そこに聖書の文学性を見てとったのです。私は作家のこのような聖書の読み方にとても驚かされました。と同時に、聖書学者は作家などから多くを学ばねばならない、と思わされたのです。

横道が過ぎましたが、出エジプトに戻ります。

3 出エジプト伝承の史実性

先に出エジプトは古代イスラエルの最も重要な伝承だと申しました。ならば、その伝承は史実性に基づくのでしょうか。「出エジプト」という出来事が実際に起こったのでしょうか。旧約聖書学者の中でも信仰深い研究者たちは、出エジプトを架空の物語だとは考えません。物語そのままのことが起こったのではないかもしれない。しかし、この物語の背後には歴史性がなければならない、と考えます。では、実際に起こったとすれば、いつ起こったのか、ということが問題になりますね。これについて、二つの意見があります。

一つは、列王記上の6章1節をふまえた意見です。ソロモンによるエルサレム神殿建立がはじまる最初の記事です。ソロモン王は即位四年目に神殿建立に着手するのですけれど、「それはエジプトの地を出てから四八〇年目のことであった」と記されています。ソロモンの即位年は正確には確定できないのですが、多くの研究者は紀元前の970年ころであろう、と考えています。そうすると、その四年後ですから、966年ころということになります。そうしますと、その480年前ですから、紀元前の1445年ころということになります。つまり、出エジプトは前15世紀中葉に起こった、と考えられます。事実、一部の保守的な研究者たちはそのように主張するのです。

前15世紀中葉のエジプトではどうだったのでしょうか。エジプトではメソポタミアと並んで、紀元前の3000年頃から文字が使われます。そして、この時期には実に多くの文字資料が残され、何年に誰がファラオとしてエジプトをどのように治めたかということまでわかっています。そこで、前1450年前後を調べてみますと、1479年頃から1425年ころの王はトトメス三世。このトトメス三世はエジプトのナポレオンなどと言

われまして、治世の後半、対外遠征を何度も繰り返した王でした。資料もたくさん残っていますが、そこにイスラエルのイの字もみられません。

トトメス三世を継いだのがアメンヘテプ二世。このアメンヘテプ二世も対外遠征を繰り返し、記録を残しました。その記録にもイスラエルという名は出てきません。その後にトトメス四世、アメンヘテプ三世、アメンヘテプ四世と続きます。アメンヘテプ四世は異端王イクナトンとしてエジプト史の中でも特殊な王でしたから、ご存じの方もいらっしゃると思います。彼の時代をアマルナ時代と呼んでいます。しかし、それらの王の時代のエジプトの記録にも、イスラエルという名は一切出てきません。中でもアマルナ時代には、パレスチナには都市国家が林立し、エルサレム、シケム、メギド、ゲゼルといった都市の領主たちがエジプトのファラオに書簡を出しています。これをアマルナ書簡と呼びます。エジプトのアマルナで発見されたからです、そこにもイスラエルという名はありません。

ただし、例えばエルサレムの領主アブディ・ヘパがエジプトのファラオに差し出した手紙が複数残っていますが、そこには、シケムの領主ラバユが、その周辺を制圧して自ら王となろうとし、エルサレムにも攻撃を仕掛けてくる勢いなので、エジプトに援軍を要請する書簡もみられます。ラバユはラバユで、自分はエジプトの王の忠実な僕である、と書き送っています。そういう中に、ハビルと呼ばれる集団への言及がみられます。彼らは、ときに傭兵であり、ときに山賊まがいの略奪をはたらく集団です。このハビルが後のヘブライに結びつくのではないか、という意見があります。しかし、イスラエルという名は出てきません。

このように見ますと、列王記上6章1節の480年という数字を根拠に、紀元前の15世紀中葉にイスラエルの民のエジプト脱出が起こった、という見解は、エジプト側の資料からは証明できないことが明らかです。

もう一つの見解は、出エジプト記1章11節に、イスラエルの民が奴隷として建設させられる町の名としてラメセスが出てきます。出エジプト記の12章37節には、イスラエルの民はラメセスからスコトに向けて出発したと記されています。そこで、出エジプトはファラオ・ラムセスの時代に起こったのではないか、という主張がなされてきました。先に触れたエジプトのファラオはエジプト第十八王朝の王たちです。その後、

第十九王朝が起こりますが、その最初のファラオがラムセス（一世）でした。彼の統治年数は二年ほどでしたが、その後、一人おいてラムセス二世が即位します。このラムセス二世は、ラムセス大王と言われる王でありまして、前 1279 年から 1213 年まで、65 年以上もの間統治した大王でした。このラムセス二世は、北はトルコ半島にできたヒッタイト王国と戦い、その詳しい記録も残っています。しかし、また、このラムセス二世の時代も、エジプトには夥しい数の文書や記録が残されましたが、そこにもイスラエルという名を見ることはできません。

長いエジプトの歴史の中で、イスラエルという名に言及する唯一の資料は、そのラムセスを継いだメルエンプタハ王が治世の第五年に刻ませた戦勝碑文です。そこには、メルエンプタハが征服した周辺の国々への言及がみられますが、その最後の部分に言及される九つの被征服民の中に、「イスラエル」という名が出るのです。つまり、イスラエルはメルエンプタハが征服した民族の一つでした。これがエジプトの長い歴史の中で、イスラエルという名が登場する唯一の文書です。この碑文はエジプトのカイロ博物館に展示されており、私が訪ねた 10 年ほど前までは、博物館に入った奥にあり、そのいちばん下のイスラエルという名に言及する部分は輝いていました。キリスト教圏から訪れる観光客に観光案内の人が、ここに「イスラエル」という名が刻まれている、と指で触れて説明するものですから、そこだけ黒光りがしていました。その碑文は、メルエンプタハの碑文でなく、「イスラエル碑文」と呼ばれます。イスラエル碑文と言っても、最後の部分に一被征服民の一つとしてイスラエルという名が出てくるだけなのですから。

その碑文はメルエンプタハの治世の第五年目に刻まれましたので、現在のエジプト学の年表では前 1207 年ということになります。ですから、この前後に、パレスチナの中央山地周辺に「イスラエル」と呼ばれる小さな民が存在していた、ということはわかります。しかし、それが出エジプトを敢行した民であったかどうか、ということは確証できません。

当時のエジプトには、パレスチナとの国境近くに国境警備隊が置かれていました。その国境警備隊の記録の一部が残っています。何月何日にアジアの遊牧民が何名ほどエジプトに入ったとか、逆に、エジプトの兵

士の何人がアジアに出向いて行った、という内容の記録です。しかし、そのような記録にも「イスラエル」という名は見つけ出せません。

そうしますと、歴史的には、出エジプトの出来事が実際に起こったのかどうか、起こったとすれば、いつの時代なのか、といった問いに学問的に答えることはできない、と言わねばなりません。実際に起こったとしましても、少なくともそれは、仮にエジプトに「エジプト新報」といった新聞があったとしても、その新聞の記事にもならなかったような出来事であったでしょう。古代イスラエルの人たちは、そのような出来事を自分たちの最も重要な歴史伝承として伝えたことになりましょうか。

このように申し上げると、聖書を信じている人たちの中には、失望し、傷つく方もおられるかもしれません。しかし、現在、わたしたちが手にする出エジプトの物語は旧約聖書の民が伝えた雪の結晶のようなものです。雪の結晶は、大気中の目に見えないほど小さな埃に、また目に見えないほど小さな水蒸気の粒子が少しずつ付着して、立派な六角形の結晶ができるのだといいます。出エジプトの物語はそのような結晶にたとえられる、と思います。

ちなみに雪の結晶は、すべてが違うのだそうですね。六角形が基本ですけれど、形はすべて異なるといいます。それに驚くと同時に、人間もそのようだ、と思わされました。人類が創造されてから今日まで、どれほどの数の人間が地上に生まれたのか計算はできませんけれど、人はそれぞれすべて個性が異なりますね。同じ人間でありながらみな違う。一卵性双生児でも、遺伝的にはまったく同じはずなのに、成長の過程で性格も異なり、関心も違ってゆきます。人間は雪の結晶のようだ、と思います。私はそれを神の創造の不思議な業として、非常な驚きをもって受け止めております。

それはともあれ、出エジプト伝承も雪の結晶のようなものです。一つの目に見えない核に多くの粒子が付着して、私たちが手にするような見事な物語になりました。悪く言えば、尾ひれがついて、良く言えば、様々に潤色されて、今のような壮大な物語になったのです。その伝承の経緯は必ずしも明確に後づけられるわけではありませんが、私が手にする物語は、雪の結晶のように、少しずつ潤色されて、今日のような物語に成長した、とお考えください。

4 出エジプト伝承に見る神話的要素

その、「出エジプト」伝承の結晶が作られてゆく中で、最も大掛かりな潤色といえば、「海の奇跡」ではないでしょうか。海が二つに分かれ、水が両側に壁のようになり、イスラエルの民がその間を通して脱出する場面は、出エジプトの物語の中でも、最も劇的です。私と同世代もしくは私より上の世代の方々の中には、チャールトン・ヘストン主演の「十戒」という映画を思い起こされる方も少なくないと思います。どのようにして撮影したものか、みごとに海が壁になっていました。

ところで、あのような物語はいったい何に由来するのか。最近の旧約聖書学はそれを跡づけようとしてきました。それは古代西アジアの神話伝承です。古代西アジアには、主神が「海」の怪物を撃破し、世界に秩序をもたらす、といった神話が少なくありません。その代表は、バビロニアの創世神話『エヌマ・エリシュ』です。そこでは、バビロニアの主神マルドックが「海」を意味する女神ティアマトを撃破し、その肢体をもって世界を創造します。そうした神話の痕跡は、実は、旧約聖書にも見てとれます。例えば、詩篇 74 篇 12-17 節を見ていただきますと、次のような言葉があります。

だが、神よ、いにしえよりのわたしの王よ
この地に救いの御業を果たされる方よ。
あなたは、御力をもって海を分け
大水の上で竜の頭を砕かれました。
レビヤタンの頭を打ち砕き
それを砂漠の民の食糧とされたのもあなたです。
あなたは、泉や川を開かれましたが
絶えることのない大河の水を涸らされました。
あなたは、太陽と光を放つ物を備えられました。
昼はあなたのもの、そして夜もあなたのものです。
あなたは、地の境をことごとく定められました。
夏と冬を造られたのもあなたです。

これは創造の神を讃える讃歌の一部です。そこに、あなたは御力をもって「海を分けられました」という表現が見られます。同様の表現はほかも見られます。例えば、詩篇 104 篇では、同じく創造の神を讃える中に、「主は地をその基の上に据えられた。地は、世々限りなく、揺らぐことがない。深淵は衣となって地を覆い、水は山々の上にとどまっていたが、あなたが叱咤されると散って行き、とどろく御声に驚いて逃げ去った」とあります。ここにも神による水の制圧が詠われています。

私たちは六日で天地を創造されたという創世記 1 章の物語をよく知っていますので、古代イスラエルの人々は、天地創造といえば、神が言葉によって六日の間に万物を創造された物語を伝えていた、と考えがちです。しかし、彼らの間に広く伝わっていた創造物語は、むしろ、神が海の怪物を制圧し、撃破して、世界の秩序を打ち立てた、という創造物語なのです。詩篇のほかにも、イザヤ書やヨブ記にも同様の神話の痕跡がうかがわれます（イザ 27・1、ヨブ 27・12 ほか）。

海を切り裂き、海を撃破して、世界に秩序をもたらされた、という神話が、実は、出エジプトの「海の奇蹟」の物語に援用されているのです。そのことはイザヤ書 51 章 9－10 節をご覧くださいれば、納得していただきましょう。新共同訳聖書で確認してみましょう。

奮い立て、奮い立て
力をまといえ、主の御腕よ。
奮い立て、代々としえに
遠い昔の日々のように。
ラハブを切り裂き、竜を貫いたのは
あなたではなかったか。
海を、大いなる淵の水を、干上がらせ
深い海の底に道を開いて
贖われた人々を通らせたのは
あなたではなかったか。

ここでは、ラハブや竜のような世界秩序の渾沌を象徴する神話的怪物を切り裂いて、秩序をもたらした神の業が、かつて、海を干上がらせ、

イスラエルの先祖たちにそこを通らせた「海の奇蹟」と重ねられ、それがバビロニア捕囚からの解放の希望として語り出されています。それによって、海の怪物を撃破する神話観念が「海の奇蹟」が語られる背景になった、ということが理解されましょう。

アスファルトで防水処置を施した籠に入れられ、ナイル川に流されたモーセが拾われる、という物語なども、古代メソポタミアに伝わるサルゴン王の物語とよく似ています。これなども、当時の英雄伝承が出エジプト物語の潤色に用いられたことを示していますが、詳細は省かせていただきます。

5 出エジプト ― 古代イスラエルの信仰の原点

出エジプト物語が古代イスラエルの最も重要な歴史伝承となった、と申しましたが、それはこの物語がイスラエルの民の重要な信仰と思想の基礎となったことを意味します。そこで、以下、この物語が彼らにとっていかなる信仰上の意義をもち、どのような思想的役割を果たしたのか、という点を指摘してみたいと思います。五点ばかり、申し上げることにいたしましょう。

その第一は、出エジプトの出来事こそ、イスラエルの民の歴史の起点となった、ということです。民族の出発点をなす物語であった、ということです。イスラエルの民はアブラハム・イサク・ヤコブといった、自分たちの先祖の物語を伝えました。それらもまた、イスラエルの民の歴史伝承と見ることが可能です。しかし、アブラハム・イサク・ヤコブの物語は基本的に家族の物語なのです。家族単位で語られています。この民が民族として登場するのは、出エジプト記からなのです。ヤコブの一族がエジプトにくんだり、そこに滞在する間に、民族として増えて、イスラエルの民となるわけです。ですから、出エジプトこそがイスラエルの民の始まり、民族の起点・歴史の起点として語られている、と言ってよいのです。出エジプト以降、特定の家族に視点を据えて語られる物語は、ダビデ王朝の起源を伝えるサムエル記下の王宮物語を除けば、ほかにはありません。旧約聖書の歴史伝承は、基本的に、イスラエルの民族のゆくえに関心が向けられているのです。

第二は、出エジプトの物語はイスラエルの民の神信仰の原点として伝えられているということです。それを端的に表すのは、モーセにイスラエルの神が自らを啓示して、その名が知らされた、ということです。出エジプト記には、二箇所ですれが語られます。まず3章には、ミディアンの地で神がモーセに顕現し、燃える柴の中から語りかけます。モーセが燃える柴に近づいてみると、ここは聖なる場所だから、靴を脱げ、と言われます。そして、エジプトからわが民を解放せよ、と告げられます。モーセは尻込みし、私が出かけても、お前はどのような神から遣わされたのだ、と聞かれるでしょう、と言います。すると、神はモーセに語ります。3章13-14節を読んでみましょう。

モーセは神に尋ねた。

「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいません。彼らに何と答えるべきでしょうか」。

神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」

この「わたしはある、わたしはあるという者だ」という神の答えは、ずいぶんと謎めいています。口語訳などでは「わたしはあつてあるもの」と訳されていました。この短い言葉はヘブライ語では三語でエヒエ・アシェル・エヒエといひます。これをどう訳すべきか、という議論は尽きません。これまで提案された訳の種類でも、十指に余ります。私の先輩の一人は、「わたしは、いるといたら、いる」と訳しました。「わたしは自分であろうとするようにある」との理解も見られます。あるいは「わたしはあなたと一緒にいる」という意味である、との主張もあります。「ある」ではなく「なる」と動的に訳すべきである、という説もあります。要するに、どのような訳が最善なのか、定説はないのです。私はいまだどのように訳すべきか、わかっていません。わかっていないけれども、この謎めいた言葉によって、神がその名を伝えようとしている

ことだけは、間違いありません。つまり、旧約聖書の神の名が説明されているのです。

旧約聖書の文語訳ではエホバと、口語訳からは「主」と訳されるイスラエルの神の名が、ヤハウエという固有名詞であることをお聞きになられた方は少なくないと思います。そのヤハウエ (Yahweh) という神の名は「わたしはある」というヘブライ語の元の動詞ハーヤー (hāyāh) と無関係ではないと言われますが、モーセに告げられた「わたしはある」という神の名が、ここでヤハウエという神名と関連づけられているのですね。ここから、ヘブライの存在論を導き出した神学者もおられます。

出エジプト記6章でも、神の名に関する神の言葉がモーセに告げられます。

神はモーセに仰せになった。「わたしは主である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。」(2節)

ここでは、モーセに初めて神の固有名詞ヤハウエが知らされた、というのです。つまり、イスラエルの神ヤハウエの顕現はモーセから始まった、というのです。実際には、アブラハムもイサクも、いや、それ以前からすでに、ヤハウエという神名を人々は呼んでいたのですけれど(創4・26参照)、ここでは、モーセに初めて神の固有名が知らされた、といえます。それは、イスラエルの神信仰は出エジプトのときに始まった、という理解が前提になっています。つまり、出エジプトの出来事は古代イスラエルの信仰の原点であった、というのですね。

神の名の顕現だけではありません。旧約聖書の民は自分たちを神に選ばれた聖なる民と理解しましたが、その神の選びもまた出エジプトの出来事によって基礎づけられました。そのような選民思想をまとめた箇所の一つが申命記7章6－8節です。それによりますと、神ヤハウエはイスラエルの民を選んで、「聖なる民」「宝の民」とされた。しかし、それはこの民が強くすぐれていたからではない。むしろ、この民は貧弱な民であったけれども、先祖への誓いのゆえに、この民をエジプトという「奴隷の家」から導き出してくださった、と。出エジプトの出来事は、イス

ラエルの民にとって、神の選びを具体的に伝える物語でもありました。

6 年ごとに想起すべき出エジプト伝承

第三に、出エジプトの出来事はイスラエルの民の最も大切な歴史伝承ですから、毎年繰り返し、この出来事を記念することになりました。彼らは年ごとに三つの祭を祝わねばなりませんでした。過越の祭、仮庵の祭、そして七週の祭です。それらは、特にはじめの二つの祭は、出エジプトを想起する祭と定められました。

過越の祭は、ご存知のように、10番目の災いの奇跡と関係づけられました。神の使いがエジプトの初子を殺害するのですが、その際、イスラエルの民の家に入らないように、イスラエルの民は子羊を殺して、その血を入口の鴨居と柱に塗りました。神の使いはそれを見て、そこを過ぎ越しました。そのことを記念して、家族ごとに子羊を屠^{はひ}って食べるのが過越の祭でした。過越の祭には、酵母を入れないパンを食べる除酵祭が重まりました。エジプトを脱出するとき、パン生地にはイースト菌を入れてふくらませてから焼くことなどできなかった。そこで、出エジプトを記念する祭では、イースト菌を入れないで焼いたパンを食することが定められました。

過越の祭や除酵祭は、起源は牧羊民や定住農耕民の祭に遡るといわれます。しかし、そうした祭が出エジプトと重ねられ、毎年3月、春分の日の次の満月の前の週から祝うことが定められ、人々は年ごとにエジプトの出来事を想起したのです。ユダヤ教徒は、今日なお、世界各地で、この祝祭をもっとも大切な祭として守っています。子羊を殺すということはできませんが、この時期、イースト菌を入れないパン、具体的にはクラッカーを食べて過ごします。また、過越の祭は出エジプトを記念する祭ですから、ユダヤ教徒はハガダーと呼びまして、過越の祭の式次第と出エジプトの物語を少し簡略にした伝承を用います。

過越の祭で思い起こすことがあります。アメリカ・マサチューセッツ州にアマースト大学というリベラル・アーツの大学があります。同志社大学を建てた新島襄が、さらに内村鑑三などが学んだ大学です。日本ではあまり知られていませんが、大学院をもたないにもかかわらず、非常

にレベルの高い大学です。私は6年前、半年ほど、初めてアメリカの東海岸のニューイングランドで過ごしました。イエール大学で研究をしました。イエール大学の図書館にはバビロニア・コレクションという、アメリカの中で最も多くの楔形文字が収集されている研究部があるので、そこで半年、研究したのです。

その間、二度ばかり、車を走らせて、アマースト大学を訪れました。学生数1,600名弱の小さな大学です。そこを卒業した学生たちは、ハーバード大学、イエール大学、プリンストンやシカゴ大学などの大学院に進んで行くのです。数は忘れましたけれど、そのアマースト大学卒業者でノーベル賞を受賞した人たちの写真と名前が図書館の前に並んでおりました。古い礼拝堂には、歴代の学長の肖像画がずらっと並んでおり、その一つに学長ではない日本人、新島襄の肖像画があります。内村鑑三の肖像画も学長室にあると聞いていましたが、現在では図書室です。まあ学長室より図書室のほうが内村鑑三らしいとも思いました。

そのアマースト大学に、スーザン・ニディッチというユダヤ系の聖書学者がおり、彼女が『ヘブライ語聖書に見られる戦争』という本を出しました。残念ながら日本語訳はありませんが、なかなか印象的な研究書でした。内容はともかく、その「まえがき」に書かれてあったことは印象的でした。彼女は子供の頃、ユダヤ人ですから、毎年、一族で過越の祭を祝い、祖父が出エジプトの話をしてくれた。そのときに、自分のいとこの一人が、祖父に「おじいちゃん、エジプトから救い出されたイスラエル人はいいけれど、海でおぼれ死んだエジプト人はかわいそうじゃないのか」と聞いたのです。そうしたら、祖父は「お前の言ったことは正しい」と答え、「これからは、過越の祭には、救われたイスラエルの民の感謝のお祈りだけではなく、そこで亡くなったエジプト人のことを思って、そのことも祈りに加えよう」と言った。その後、過越の祭には、エジプト人のための祈りが加わった、というのです。私はそれを読み、印象深く心に刻まれました。そこに、実に弾力的な、よい意味でのユダヤ的な発想を感じ取ったのです。

過越の祭に次いで、仮庵の祭です。仮庵の祭は、家の庭先に木の枝などで作った粗末な仮庵を作って、そこで一週間食事をするという祭ですね。レビ記23章43節にはその理由が書かれています。神がイスラエル

の先祖たちをエジプトから導き出したとき、彼らが仮庵に住まねばならなかったことを想起するためであった、というのです。今日、マンション住まいの敬虔なユダヤ教徒たちは、ベランダに仮庵をしつらえて、仮庵の祭を守っている、と聞きました。

三大祝祭の最後は七週の祭です。過越の祭から七週目に祝われます。この七週の祭は聖書によれば、麦の収穫時期と結びつけられ、出エジプトとの直接的な関連が記されていないのですが、七週目といえば、エジプトから出てから3ヶ月目のはじめです。それはシナイ山の麓に到着した時期です。これが七週の祭の時期と一致します。ですから、七週の祭は、ヘブライ語ではシャブオットといいますが、シナイ山の麓にイスラエルの民が逗留したことと重なります。そのために、後には、エジプトを脱出した後、シナイ山で律法が与えられたことを記念する祭とされました。

七週の祭は過越の祭の七週が過ぎた時期ですから、新約聖書ではペンテコステと呼ばれます。ペンテコステとは50日目という意味ですが、七週の祭は49日が過ぎた日ですから、ペンテコステと同じです。

このように、出エジプトの出来事は、年ごとに、祝祭の中で想起されたのです。繰り返し想起すべき出来事として、大切に伝えられたのです。

7 社会法の根拠、倫理の基礎として

出エジプト伝承が果たした役割の第四は、律法、特に社会法に及ぼした影響です。旧約聖書の律法はほぼすべて、出エジプト後、それこそ3ヶ月目に、シナイ山でモーセを介して神から民に与えられた、と伝えられます。申命記によれば、さらにその後、モアブの野において、もう一度、律法が与えられるのですが、基本的に、旧約聖書の律法はすべて、モーセを介して出エジプトの民に与えられたことになっています。例外は、洪水物語の最後に告げられる血を食することの禁止（創9・4）、アブラハムに命じられた割礼（創17・11-14）の二点でしょうか。もっとも、前者はレビ記12章3節などにも、後者はレビ記17章10節ほかにも、定められていますから、律法はすべてモーセを介して与えられたと申せましょう。ですから「モーセの律法」とも言われます。

その律法を細かく見てゆきますと、モーセ時代ではなく、はるか後代に成立した律法も少なくありません。例えば、律法の多くは定住農耕を前提にしています。申命記などには、王の律法などもあります。こういう律法は、歴史的に見れば、イスラエルの民が定住農耕に移行してから、あるいは王国が成立してから、成立した律法であるに違いありません。しかし、そうした律法も含めて、すべての律法が出エジプト後にモーセを介して与えられたというように、編集されているのです。それは、出エジプトこそが民族としてのイスラエルの出発点だったからです。それはさらに律法の内容についても言えます。

例えば、律法の中でも最も重要な「十戒」を見ますと、その前文には「わたしは主、あなたの神、あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神である」と宣言されています（出エ20・2、申5・6）。日本国憲法の最も重要な精神が憲法の前文にあるとすれば、十戒のもっとも重要な点もまた、エジプトの奴隷からの解放を告げる、この前文に記されている、と言ってよいでしょうか。

それだけではありません。モーセ律法の中には、社会法と言われる部分があります。その基本的な特徴は、社会的に弱い立場に置かれた人々の保護にあります。その際、「孤児と寡婦」あるいは「寄留者」がそうした社会的弱者を代表します。そして、彼らを保護すべきことが繰り返されています。出エジプト記、レビ記にも、そして申命記にもそれは繰り返されます。その際、社会的に弱い立場に置かれた人々を保護しなければならない根拠が示されますが、そこで出エジプトの出来事が想起させられるのです。エジプトで奴隷であり、寄留者であったイスラエルの民であればこそ、彼らの苦しい立場をよく知っているはずである。それゆえ、社会的に弱い立場にある人々をしっかりと保護しなければならない、というのです。そうした立場は、イザヤやエレミヤをはじめとする預言者たちの間にも貫かれています。申命記からそうした事例の一つを引用させていただきます。

寄留者や孤児の権利をゆがめてはならない。寡婦の着物を質に取ってはならない。あなたはエジプトで奴隷であったが、あなたの神、主が救い出してくださったことを思い起こしなさい。（申24・17-18）

これに続いて、いわゆる「落穂拾い」の定めが記されます。「畑で穀物を刈り入れるとき、一束畑に忘れても、取りに戻ってはならない。それは寄留者、孤児、寡婦のもの」だからだ、ということです。オリーブや葡萄といった主要産物の収穫の場合も、同様でした。そして、その最後に「あなたは、エジプトの国で奴隷であったことを思い起こしなさい。わたしはそれゆえ、あなたにこのことを行うように命じるのである」とその理由が付け加えられました（申 24・22）

このように、社会的弱者の保護を命じるモーセ律法の社会法は、出エジプトの出来事を根拠としています。これを広い意味で表現すれば、出エジプトの伝承が古代イスラエルの人たちの社会倫理の基礎になった、と言えましょうか。貧しい者や弱い者たちを虐げる同胞を批判する預言者たちの信仰の倫理もそこに根差しています。出エジプト伝承の果たした重要な点の一つがここにありました。

古代オリエント学という視点から、その点にもう少し踏み込んでお話をさせていただきます。そもそも、人類はいつから社会的にハンディを負った人たちを保護し始めたのでしょうか。実は、すでにネアンデルタールの時代から人類は身体的な障害を負った同胞を大切にしたり、という説があります。イラクの北、イランと接するところにシャニダール洞窟があります。1960年代、アメリカの考古学者 R・ソレッキがその洞窟を調査し、ネアンデルタール人の埋葬跡を発見しました。有名になったのは、ネアンデルタール人が葬られた洞窟内の土から、20種類にも及ぼうとする花粉が大量に検出されたことです。ソレッキによれば、すでにネアンデルタール人たちは花を手向けて死者を葬っていたということです。

さらに、身体的に障害を負っていたとみられるネアンデルタール人の骨も発見されました。しかも、年齢は50歳前後と推定されました。50歳代は、当時の寿命からすれば、すでに高齢者です。ソレッキはそうした事実から、ネアンデルタール人は障害を負った同胞を優しく保護する社会を形成していた、と解釈しました。ネアンデルタール人は今から四万年ほど前に絶滅したとされる人類ですが、ソレッキの推測が正しいとしますと、人類は気の遠くなるような昔から、ハンディを抱えた同胞を保護してきたことになります。それはほかの動物社会には観察されな

い、人類にのみ見られる行動です。

歴史時代になりますと、人類最初の文字文明が発達したメソポタミアでは、聖書より 1000 年以上も前に、「孤児と寡婦」の保護が語られていました。最古の文書は、紀元前の 2400 年ころ、シュメルの都市国家ラガシュの王ウルカギナ（最近ではウルイニムギナと読まれますが）が残した社会の「改革碑文」です。彼は社会改革を断行し、それを「ウルカギナの改革碑文」として残しました。その中に「余は、孤児と寡婦を、富める者、力のある者に引き渡さなかった」と記されています。その後「孤児と寡婦」の保護は、シュメルの都市国家の王の伝統になり、それはバビロニアなどの領土国家の王たちにも引き継がれたのです。

例えば、今日に残る人類最古の法典『ウルナム法典』を残したウルの王ウルナムは、前 2100 年ころ、その法典の序文で自らを正義の王として誇る中に、同じように、「孤児と寡婦」を守ったことを記しています。そうした伝統を引き継いだのが、広く知られた『ハムラビ法典』です。ハムラビ王もまた、法典の「あとがき」に、彼が「孤児と寡婦」を守る正義の王であることを高らかに宣言しています。その伝統はさらにシリアにまで広まりました。ですから、「孤児と寡婦」の保護の要請は旧約聖書の独創ではなく、古代西アジアに古くから伝わる伝統に連なります。

ところが、旧約聖書はこの伝統に二つの新しさを付け加えました。一つは、古代の西アジアにおいては、孤児と寡婦に代表される社会的弱者保護が王の義務であったのに対して、旧約聖書ではそれが、王ではなくて、イスラエルの民が守らなければならない律法に組み込まれたことです。もう一つは、それに「寄留者」の保護が付け加わったことです。「寄留者」とは「よそ者」ですが、これを厳密に定義することは容易ではありません。邦訳旧約聖書でも「寄留の他国人」と訳されることもあります。外国人とは限りません。イスラエル国内でも、他部族から来た人が寄留者と呼ばれました。いずれにしても、保護されるべき社会的弱者として、旧約聖書においては、「孤児と寡婦」に「寄留者」が加えられたのです。そして、その理由として、イスラエルの民はエジプトにおいて寄留者であったから、寄留者の辛さを知っている、と出エジプト記 23 章 9 節に記されています。

あなたは寄留者を虐げてはならない。あなたたちは、寄留者の心を知っている。あなたたちは、エジプトの国で寄留者であったからである。

モーセ律法は、このように、社会的に弱い立場にある存在である孤児と寡婦に寄留者を加え、その保護を定めました。そして、出エジプトという民族の歴史伝承がその根拠とされたのです。かつてエジプトの奴隷であったイスラエルの民がそこから解放された、という伝承が、社会的な弱者保護の律法の根拠、ひいてはそのような社会倫理の基礎となりました。

8 希望の原理

最後に、出エジプトの物語は、単に過去の出来事として想起された民族伝承にとどまらず、将来の希望を紡ぎ出す希望の原理でもあった、ということに触れておきましょう。それが出エジプト伝承が果たした役割の第五です。

エジプトの奴隷から解放されたイスラエルの民でしたが、後に、祖国を喪失し、捕囚民の悲哀を味わいました。前 598 年の第一回、587 年の第二回バビロニア捕囚がそれでした。捕囚の時代はペルシア王キュロスがバビロニアを征服する前 539 年まで続きました。第一回捕囚から数えれば 60 年が経っていますから、世代にして、三世代を数えました。その間の事情の一端が詩篇 137 篇に詠われていることは、ご存じの方も少なくないと思います。

そのバビロニア捕囚時代の末期、捕囚解放の「おとずれ」を告げた預言者たちがいました。その一人はイザヤ書 40 章から 55 章までの預言詩を残した匿名の人物です。便宜的に「第二イザヤ」と呼ばれています。彼は「慰めよ、わが民を慰めよ」（イザ 40・1）と解放の到来を告げる冒頭の詩をはじめとする、数多くの雄渾な詩を残しました。それらの多くは、バビロニア捕囚からの解放の宣言でしたが、その際、かつての出エジプトの出来事を想起させ、捕囚からの解放を「新しい出エジプト」「第二の出エジプト」として語り出したのです。

例えばイザヤ書の 43 章 1 - 2 節には次のように詠われています。

ヤコブよ、あなたを創造された主は
イスラエルよ、あなたを造られた主は
今、こう言われる。
恐れるな、わたしはあなたを贖う。
あなたはわたしのもの。
わたしはあなたの名を呼ぶ。
水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。
大河の中を通っても、あなたは押し流されない。

バビロニアからイスラエルに帰還する際には、大河ユーフラテスを渡りますけれども、ここで「大河の中を通っても、あなたは押し流されない」と詠うとき、出エジプトの「海の奇跡」が念頭に置かれているのです。同じく、43 章 16 節では、神ヤハウェのことを「海の中に道を通し、恐るべき水の中に通路を開かれた方、戦車や馬、強大な軍隊を共に引き出し、彼らを倒して再び立つことを許さず、灯心のように消え去らせた方」と詠います。ここでも、出エジプトの出来事が想起されています。そして、そのような神ヤハウェが「新しいこと」を行われる、ということです（同四 3 章 19 節）。「新しいこと」が「新しい出エジプト」を意味することは言うまでもありません。

イザヤ書 51 章 9 - 10 節には、すでに引用しましたように、海を制圧する神話をふまえながら、かつての出エジプトと同じような救済の出来事がもう一度起こるであろう、と詠いあげられています。別の言葉に言い換えますと、かつての出エジプトの出来事は過去に起こった一回限りの出来事ではなく、苦境から民を解放する出来事として繰り返されるということです。出エジプトの物語が希望の原理となっているのです。そしてそれは、旧約聖書の民の伝承にとどまりません。ユダヤ教徒が残した聖書を旧約聖書として引き継いだキリスト教を通して、出エジプトの物語は一民族を越えて、世界の人々に希望を与える物語として読まれることになりました。

ごく最近の事例を申しあげれば、アフリカから奴隷としてアメリカに

連れてこられた人々が、奴隷からの解放の願いを籠めて歌い継いだ、スピリチュアルズ（「霊歌」）と呼ばれる歌の代表、Go Down, Moses「行け、モーセ」がそうです。「行けモーセ、あの老獺なファラオに告げよ、わが民を解放せよ」と繰り返される、広く知られた魂の叫びです。これを歌い継いだ人々にとって、出エジプトの物語は奴隷からの解放の希望の物語となったのです。あるいは、1910年から日本が太平洋戦争に敗北する1945年まで、日本は朝鮮半島を植民地として支配しました。朝鮮は日本よりも長い歴史をもつ国です。日本は百済から仏教を受容し、養蚕や冶金や陶芸など、朝鮮から多くの文化や技術を学んだのですが、明治期、富国強兵を、さらには大陸進出政策を掲げた日本は朝鮮半島を35年にわたって支配し続けました。その間、朝鮮半島のキリスト教会では、出エジプトの物語が最も好んで読まれた、と伝えられます。エジプト脱出が日本の植民地からの解放と重ねられたことは言うまでもありません。

出エジプトの物語は、このように、抑圧にあえぐ人々にとっては解放の物語として、そこに希望が託されたのです。今日の地球上に奴隷制度はありません。しかし、この美しい地上に不合理な抑圧や搾取が続く限り、出エジプトの物語は希望の原理としての意義を失わないのではないかと、そのように思われるのです。

以上、少し予定よりも時間を超過してしまいましたが、出エジプトの史実性と物語の思想的・信仰的意義を語らせていただきました。これをお聞きになりながら、ならば、私どもが生をうけた現代日本が繰り返し想起しなければならない出来事とは何なのか、自問された方もおられたのではないのでしょうか。いえ、日本などと大げさに考えなくても、私ども一人ひとりが生き生かされる中で、とりわけ、信仰を与えられて生き生かされる中で、繰り返し思い起こし、そこに立ち返るべき原点とは何なのでしょう。弱小の民イスラエルの信仰の原点として伝えられた出エジプトの物語に触れるとき、私どもは自らにそう問わずにはいられないのではないのでしょうか。

拙い話をご清聴いただき、ありがとうございました。

（付記：本稿は2017年9月14日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演を文章化したものです。）